

乙

特249  
981

下野史談會長 田代黑瀧著

アツツ島玉碎勇士

下野史談會發行



始



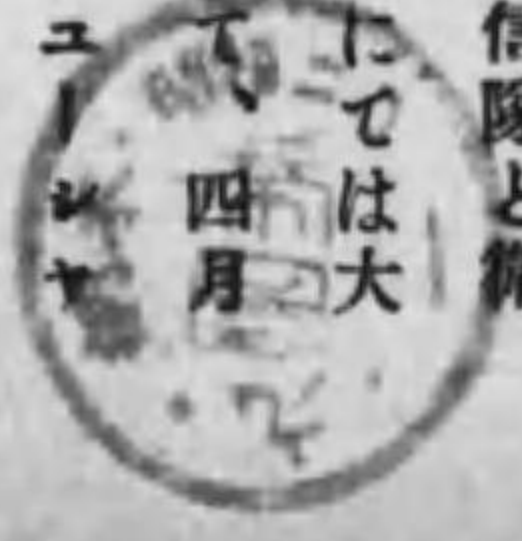
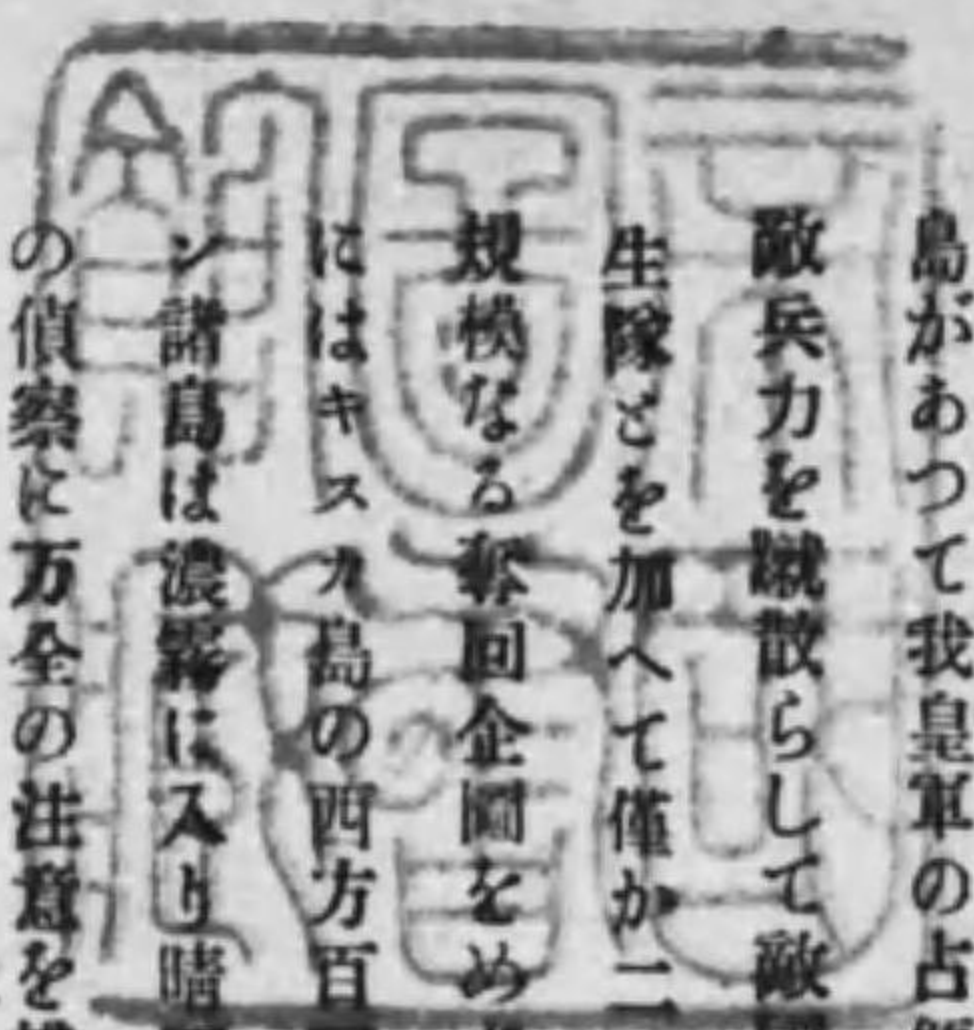
特249  
981

# アツツ島玉碎勇士

## アツツ島戦況

田代 黒瀧

北米アラスカ半島の西方に羅列する嶋嶼中にアリユシャン列島がある、其列島中にアツツ島、キスカの島があつて我皇軍の占領する處であつた。米國太平洋艦隊主力と一個師團約二萬の大軍を引受け散々に敵兵力を蹴散らして敵國民の心膽を寒からしめた、山崎中將以下歩兵、砲兵、工兵と若干の通信隊と衛生隊とを加へて僅か一千數百名に過ぎない寡兵を以て守備してゐた、昭和十八年の初より米國側では大規模なる奪回企圖をめぐらしてアリユシャン列島傳へに航空の基地を作り次第に西進せしめて、四月にはキスカ島の西方百三十キロのアムトチカ島に一個大隊の兵力を上陸せしめ、五月にはアリユシャン諸島は濃霧に入り晴天稀なる季節となつたのに乘し敵は攻撃を開始せんに對し、我が守備隊は敵狀の偵察に万全の注意を拂ひ、若し進攻し來らば一舉に撃滅せんと腕を撫して待ち構へてゐた、五月十二日朝濃霧にまぎれて、大艦隊に護られて輸送船團をアツツ島周邊に進め、其一部を上陸せしめた、斯くて敵は同日午前二時頃より九時五十分頃に至る間に飛行機を利用して我が守備隊に對し投降勸告文を投下した、同十時頃に及んで岬の監視哨は〇〇岬より〇〇方面に向ふ多數の集團を發見した、同十時三十



分頃には島の南岸の〇〇灣方面にも敵の上陸せること判明した、同方面の守備隊も厥然猛反撃を開始し併し敵は北から又南からと續々上陸しその兵力も又寡少なからざることが判明した、かくて我が守備隊の猛反撃にも拘はらず、敵は午後七時頃には〇〇岬の先頭に進出し、それと同時に〇〇灣方面上陸部隊も次第に近接して來た、此間東端の〇〇灣にも敵の兵力の一部が上陸して來たが我が勇武なる兵に水際に於て全滅せしめた、夜の八時頃には北岸上陸の敵は〇〇浦より〇〇浦北區に進出し來たので、我が守備隊は十二日夜半を期して勇猛なる夜襲を決行し島南岸に上陸せる敵を全線に亘つて約千メートル乃至千五百メートル退却せしめ〇〇灣より再び上陸せんとする敵を殲滅した、十三日拂曉に至り敵は後部隊を待んで活潑なる行動を開始し〇〇灣にも一部隊を上陸せしめ、裝備の優秀な兵力の多數を待み同日正午より猛烈なる前進攻撃を開始するに至つた、同方面を死守する我が地區隊中には若干の損害を生ずるに至つたが、我が守備隊は全線に亘つて能く敵を誦并し守備陣を確保したのみで薄暮に及んで〇〇山方面に進出した敵の突撃隊を谷間の一本道にて山砲を以て殲滅した、十四日にアツツ島附近に其姿を現はした敵戦艦一隻、巡洋艦二隻、驅逐艦三隻××浦を除く各地區に猛烈な艦砲射撃を加へたのでのみならず正午頃より敵の爆彈の雨にさらされた、それが爲め十三日敵上陸より同日までに我が損害は僅かに數十名に過ぎなかつた。米國兵が上陸してから四日目の十五日にも我が地區隊は各陣地を確保して我れに十倍する敵の前進を拒し殊に××方面は十四日夜陰に乘し一部を以て夜襲を敢行て敵陣を擾乱するなどの

快舉を行つたが敵は漸次重火器を揚陸するに及んで戦闘は困難となつた、同方面の守備隊は全員玉碎の運命に陥つて××台は全く敵手に委ぬるの余儀なきに至つた、北區隊長はこれが奪回を企圖せるも如何せん兵力少なく齒を喰ひしはつてこれを断念するの外はなかつた、他方××山方面に對する敵の攻撃も激烈を極め敵の放つ十五センチ砲弾は我が陣地を覆ふて彼我の距離は百五十米乃至二百米に接近して來た、我が地區隊は同夜夜半を期し捨身の夜襲を敢行して敵をして九百米を退却せしめた、此夜襲は眞に肉弾相うつ混乱戦闘であつた、しかし此日は霧薄らいて敵艦砲射撃は猛烈を極め且つ××灣に侵入し來つた敵輸送船は此日も終日揚陸を續行してアツツ島奪還を目ざして侵攻して來た敵軍總兵力は一ヶ師團約二万と判断されるに至つた、明くれば十六日敵はいよゝゝ重火器並に裝備を整へて勢を増し、又飛行機によつて測定をなし、海陸空の共同猛射を加へて來たので我が一小隊は全滅の運命に陥つた、此時を敵手に委ぬるに及んで我が守備陣地を確保することは困難となつて來た、又此日××灣方面の敵輸送船は相變らず揚陸を續行し敵手に委ねた××山附近には敵戦車が進出して××湖南面守備隊も次第に壓迫され××山の陣地また危殆に瀕せる状況を見て山崎部隊長は同日つひにそれまでは××川上流にあつた彈藥食糧などを灣口に移駐××山××嶽を結ぶ線を確保して反撃に出る事の決心を固めたのである。山崎部隊長は十六日夜半から十七日終日にわたつて××灣口要城へ分つて移駐を行つた、我守備××山の峻嶒を踏破、困難な××灣集結を行つた、之れに對し敵は××山××丘を中心として猛撃を行ひわが

襲撃に妨害を加へたが早晩敵飛行機は目測を誤つて敵の第一線を盲爆同志討ちの滑稽を演じた、盲爆を受けながら××灣口に移駐を終了した我が守備隊××岳××山××浦を攻撃しまづこれを奪還する作戦に出た、これに對し敵は我軍の××山××台の撤退に伴つて××丘に銃砲撃を集中し來つた。しかしこの日敵は全般的には新なる攻撃準備をせるものの如く煙彈を用ひて彈着修正を行つたり、落下傘投下により艦砲射撃の目標を計等の戦術を用ひた、その攻撃軍点は××山××丘××山に置かれ敵の優勢に厭倒された我が守備隊は後退の準備を命じた、然るに翌二十日、我が守備隊は依然として其陣地を確保したが〇〇灣方面より進出し來れる敵は〇〇台に進出して我が方陣地を望見し得る態勢をとり艦砲射撃し相俟つて時間と共に我を壓迫した、二十一日山崎部隊長は諸般の情況に鑑みて〇〇岬より北進〇〇山〇〇丘〇〇山〇〇岳を繋ぐ線を新なる守備線としあらゆる兵力を動員して第一線に配備し、傷病患者は〇〇灣口に集結し、その他の戦闘に堪え得るものは軍屬に至るまですべて銃器を執つて前線配備につき飽までも敵反撃の態勢を整ひた、しかし優勢なる敵に阻まれて意の如くならず、山崎部隊長は兵力の消耗せざるうちに最後の決戦を行ふことを決意するに至つた、翌二十二日は朝來敵艦上機飛來し敵航空母艦の來航することを思はしめた、しかし其翌二十三日はアツツの上空やや晴れて午前十一時頃我が飛行機が飛來しこれを發見した、將兵は翼の日の丸を仰いでただ感泣した、續いて我が飛行機の敵艦隊攻撃により遙か洋上に水柱と火焰の揚がるのを望見して全將兵は胸がすく思ひがした、アツツ島上に於ける

敵の猛攻は物凄く、我が〇〇守備隊の一角は崩れて最後の據点と頼んだ〇〇山兩麓に激戦が展開した、この一帯は岩磐が露出し深い濠は掘れず、おまけに砲彈が岩磐にあたつて飛び散り文字通りの血戦力闘が行はれたのである、山崎部隊長以下奮戦せるにも拘はらず、我が重火器と、豫備兵力がないため、第一線歩兵は全滅して砲兵、工兵らが代つて守備位置につく状態を呈した、二十四日は濠が深かつたためか敵の攻撃は珍らしく緩慢であつた、此日軍司令官はアツツ守備部隊が孤壘よく奮戦せる状を見てこれまでの健闘を謝し最後の善戦を祈念するの旨の激勵電を送つた、また陸相參謀總長よりも同様懇篤なる激勵電が發せられたが、これに對し山崎部隊長は「將兵の勇氣百倍誓つて玉碎りて本分を完うせん」との返電をよこした、このアツツ島守備隊の勇敢なる偉勳 畏くも上聞に達せられ、未だ前例を見ざる優渥なる勅語さへ賜はつた、この優渥なる勅語は二十五日電波に託して山崎部隊長を通し全將兵に達せられた、北邊の孤島にあつて聖旨を傳へられた全將兵はたゞ感泣に誓つて聖旨にこたへ奉らんの決意を新たにした、山崎部隊長は「全力をふるつて敵を撃滅し聖旨に副へ奉らん右執奏方頼」の謝電を發し全將兵玉碎の決意はこゝに固められたのである、二十六日は敵の猛攻は依然として繼續されたが、山崎部隊長は無電機が不通になることを慮つ銃火の間に筆をとりアツツ島に敵が上陸して以來の戦闘状況を具さに執筆、これを上司に報告するとともに自軍を思ふ熱情を披瀝した、二十七日と二十八日は我守備部隊がいよいよ最後の突撃玉碎準備を行つた日である、即ち山崎部隊長は他に策なきにあらずと雖も戦力を

消耗して敵に打撃を興へることが不可能なることを慮り最後の突撃準備を進め戦闘に堪へざる重傷者は各自決、生存は總て銃をとつて一線配備についた、玉碎準備の完了を待つてゐた、山崎部隊長は、諸上司に對し懇情を謝するとともに飛行機により玉碎の状況を見てもらいたいと電報を發し、二十九日夜「これで無電機を破壊する」との最後の快別の辞をよせてきた、斯くして二十九日夜半を期し全將兵が群がる敵軍を求めて突撃したのである。

部隊長大佐山崎保代は八月二十八日陸軍中將に進級し、本縣人陸軍大尉小野金造は少佐に、陸軍少尉森山茂は陸軍中尉に任せられた。昭和十九年四月十九日には優渥なる恩賞を蒙つた。

本縣にて其玉碎された勇士は次頁の如し

兵長 山田元雄

宇都宮市西原町の人、山田新六氏の長男にして大正元年八月二十三日生る、大正十四年三月宇都宮中學校に入學し昭和六年三月卒業した、昭和八年三月東京藥學專門學校に入學して、勉學優良の成績を以て昭和十一年三月卒業、其七月府縣立金生病院に勤務し、昭和十五年三月栃木縣廳に出向を命ぜられ、衛生課勤務の者であつた。

上等兵 渡邊春雄

宇都宮市旭町一丁目の人、父は渡邊斧作氏母はサト氏其長男にして大正三年三月十日生る、祖先より染物商を業とした、親思への孝行者にしてよく母親の身の上を案じ出征中と雖もよく孝心の情深き書狀を寄せた、九歳の時父に死別れ母親一つの手によつて育てらる、宇都宮市西校に通學し修業の後は南校にて高等科を修業、先祖の家業を繼かんとして東京高田の青柳染物工場に入り専ら染物の技工を専門に研究し、二十三歳にして高田家より暇を乞ふて、郷里宇都宮に歸へり専ら祖父の業を受け京染に従事した家庭は母親と兄弟と職人にて圓滿によく繁昌した、二十三歳の時より七年間苦心の結果此地方に於ける有名な染物屋となつた、補充兵の籍あつたが昭和十七年〇〇部隊へ教育召集令に接し、入隊二ヶ月前

に妻を迎へた、昭和十八年五月以來通信はなかつた。

### 上等兵 早瀬 萬吉

宇都宮市花房町一九〇二番地の人、早瀬文吉の六男にして、幼して両親に死別れ兄の文藏氏に養育せられた、西原小學校を卒業し、更に南校に於て高等科を卒へ、年十五歳の時、東京協立興業社に入り刻苦勤勉熱心に其業を勵み其技術に長しければ、三鷹出張所中島飛行場の電氣取付専門であつた、補充兵であつた兄も戦死、今自分も又玉碎たらんとす、長兄夫婦の後々のことはよく頼む、早瀬家の名譽をと申され勇躍出征された。

### 兵長 土屋 二雄

宇都宮市江野町の人、父は清吉、母ハツ氏の長男にして、大正三年四月二十七日生る、性温厚柔和にして人に接するに温情を以てす、宇都宮南校を卒業後書店の店員として修行した、父は長い間病弱にして八年間も病床ありて家業も碌々營むこと能はざれば、母獨の身にて家業萬端勞苦し父を看護し、二雄君を養育するなと容易ならざる苦辛であつた、これを察した二雄君はよく母を助け其業を繼けた、十八歳の時父は死亡したので母の手となり足となりて家業を勵み、二十二歳にして主人より暇を乞ふて獨立古

書店を營業となす、宇都宮市附近は勿論芳賀逆川方面までも其業務を擴張し、得意よりの信用を得て商業界に頭角を露はさんとするの勢であつた、妻マツ子を迎ひ商賈益々繁昌に向ふ矢先き補充兵として召集せられたものである、常に酒煙草をやらず、只好むものは讀書と釣、將棋などであつた、極めて眞似面て内剛にして外柔男子的の好人物あつた。

### 上等兵 戸澤 吉之助

戸澤吉之助は栃木市東町に生る、後本町六百二十番地に移住した、父は音吉、母はシゲといふ、母には昭和二年死別れ父の手に養育されたが、父も昭和十七年八月に死亡した、主として兄の繁一氏に養育せられた、栃木市第一小學校を卒業してより群馬縣沼田町の小泉榮太郎氏方にて靴製造業の徒弟となりて専ら其業に熱中誠意奮勉せしがため主人よりの信用も厚く、又友人間の交誼も篤く同僚に誠實であつた、性温厚にしてよく兄に順事し、兄弟仲よく年月を経しも姉には別れ、兄と互に一家の隆昌を計つたものであるが、アツツ島にて玉碎されたものである。年二十三歳 戒名 玉功院式勳吉相清居士

### 上等兵 横山 兵四郎

足利市本城三丁目の人、父は倉次郎氏、母はタケ氏の四男、大正九年七月二十一日北郷村大字田島に生

る、北郷小學校卒業後は専ら機業に従事し親の手助けとなつた、後足利柳原鐵工所の職工となり更に中島製作所小泉工場に勤務よく其職責を全うした、昭和十三年七月足利市本城三丁目に移住したものである、補充兵として入營三ヶ月間教育を受けたるま、直に再度の應召となつたものであつた、兄弟四人あつたが何れも早死せしは氣の毒に堪えない。

### 陸軍少尉 丸山新次

足利市本城二丁目の人、父は貞次郎と稱し幼少の時死去、母のハル氏の手にて養育せられ孝養厚く又實直の方であつた、友人よりの信用も厚く、事に當りて真似面にて輕粗なる行をなさず、明治三十五年十二月四日を以て生る、柳原小學校を卒業し更に補習科を修業し、品行方正衆望ある青年であつたので丸山仲吉氏其人たるを望み、養子に迎へた、養父仲吉氏、母はスズ氏といふ、妻女フミヨ氏のために養育となり家庭圓滿に何不自由なく暮してゐた、又綿織業に従事し、家業を勵み一家の繁榮を來たせしも時代に即應し、現役を志願し、滿洲、支那事變に従事、各地に奮戦したるも昭和十五年一應解除となつたが再度應召某隊に入營したものである、フミヨ氏の間に一男あり、昭和十八年五月アツツ島にて玉碎被名 北香院玉碎新英居士

### 上等兵 須永允次

足利市永樂町二七〇の人である、母カヤ氏の長男にして大正十年一月五日生る、大正十二年永樂町焼失せし後、大正十二年十二月二十八日旭町二二九五番地に移轉した、牛田鐵造氏の養子となつて常に愛せられ家内睦しく日を送つた、柳原尋常科卒業後靴製造所の職工となつたが、鐵工所に勤務することになつた、昭和十六年十二月一日第一補充となる、昭和〇年〇月〇日教育召集された。

### 陸軍曹長 栖原治平

佐野市金井下町二千四百四十壹番地の人、父は眞五郎、母はツネ氏と云ふ、大正六年十月二日二男として生る、早く父に別れ母に養育せらる、佐野第一小學校を卒業後、東京市下谷區、家具商に入り其商業に従事し、其忠實なるに主人も常に信用し他店員の模範とした、常に多趣味を有し、且性快活て表裏なき快男子であつた、適齡に達するや現役に従事し、昭和十五年九月除隊、更に昭和〇〇年〇月〇〇日應召〇〇〇〇〇部隊に入隊、野戦に従軍せざるは残念である、常に從軍を望んでゐた、けなげなる母親も御國の爲めに功名させたしと念してゐた、母親を思ふ孝行心は毎度の書面にても察せらる、又親に安心させる書状のみである、軍隊にありても趣味多きため人氣を得た、或時酒宴を張り隠藝をなすことに

なつた、其時藝能勝れた者として山崎部隊長より賞として酒壺升賜はつたと云ふことである、人氣者であつた。 戒名 威烈院護國道治居士

上等兵 茅原 清

佐野市植野二千百九十六番地の人、父は重信、母はトメ氏との間に生れた二男である、年僅か十四歳にして父に死別れ、母の手に養育せられた、慈愛深き母の訓育を受けたるや、常に孝心深く近隣の者褒めざるはなし、殊に母は眼疾に悩まされたるを患へ一日も早く快癒あらんことを所つてゐた、植野小學校卒業後は足利市通二丁目川宗屋乾物商店にて商業に従事し、主人の信用する所となつた、他の店員の羨望する有望なる青年であつた、満二十歳まで能く勤勉に主人の爲めに働きしが、適齡になり補充兵に編入された、昭和十七年四月教育召集にて〇〇〇部隊に入營した者である、性温厚にして信用篤く、特別な人格を供へ、實直孝行者であつた。戒名は忠烈院殉國玉碎居士

上等兵 星野 義雄

河内郡上三川町江戸川の人、星野金三郎氏の長男にして母はチイといふ、大正四年九月五日生る、兄弟四人あるも三人は姉で男子は一人のみ、両親も片腕と力にしてゐた肝腎な人であつた、上三川尋常高等

小學校卒業後専ら父の指導により農業に精を出して増産に勤めてゐた、其傍ら冬季になると普門寺に於て夜學に勉學し、性質温厚で小學校時代より人に信用があつた、小學校の成績もよく、全課甲操行優を與へられた秀才であつた、青年團支部長の任を果した、補充兵であつたが昭和〇〇年〇月〇〇日教育召集令に接し部隊に入營〇月〇日終了した、〇月〇〇日宇都宮出發、子供三人あり、年二十九歳

上等兵 清水 清八

河内郡明治村大山の人、清水清一郎氏の三男にして大正九年九月二十八日生る、母はハルといふ祖先代々農業を営む兄弟七人あり、明治村小學校卒業の後は家業の手傳をなせしが、長してより東京の淺草工場に勤めしが後桃井氏の經營せし工場に勤務二十一才まで勤めしが補充兵となり、昭和〇〇年〇月〇〇日〇〇〇部隊に教育召集令に接した、三ヶ月の後召集除隊となつた、それより後は石川島の造船所に勤務してゐた、常に眞似目に其業に従事せしかば、淺井氏に見込まれて重く任用された、昭和〇〇年〇月〇〇日應召された。

兵 長 福田 勝一

河内郡大澤村大字上猪倉の人、福田福一郎氏の長男、母はセイといふ、性温厚にして親切よく親や妹の



ことを思へやり、戦地よりも妹には慈愛こめた通信が度々寄せられた、郷里の小學校卒業後、鹿沼農商學校に入學勉學せしも遠路のこととて、冬季は叔母の家に寄寓して通學せしこともあつた、鹿沼農商學校卒業は大澤村農會書記とありしも、それに甘んぜず栃木縣農事試験場に入り實地を修業した、其後上都賀郡清洲村農會の技手となりしも家庭の事情にて今市町の農會技手に轉じた、僅か二十日ばかり勤務せしに昭和〇〇年〇月〇〇日教育召集令に依り〇〇〇某部隊に入隊〇〇〇出發せし以來通知がなかつたが四十日を経て〇〇より〇〇派遣軍〇〇〇〇部隊に編入されたことが〇〇〇〇〇〇よりの通信が最後の音信であつた、妹三人ある、父が体の弱いのを常に心配してゐた孝行心の厚い方であつた。年二十三

### 兵 長 福田 大郎

河内郡大澤村大字木和田島の人、福田徳平氏の長男、大正八年三月十八日生る、温和な性質にて近隣の人に信用あり、妹に對しても懇切で他人にも何事も親切を盡した者であつた、昭和八年三月二十三日大澤尋常高等小學校卒業の後は大澤青年學校に入り勉學し、昭和十四年三月青年學校研究科を卒業した、其後の兩親の元にありて農業に従事せしが、昭和〇〇年〇月〇日入隊、兄弟としては男三人、女人 年二十五才

### 上等兵 小川 治平

河内郡雀宮村雀宮農小川才一郎氏の長男、大正十二年二月七日生る、母はフデ氏、雀宮尋常高等小學校卒業、宇都宮保線區雀宮線路班保線工手を勤めてゐたものである、二人の弟と三人の妹があつた。

### 上等兵 大關 徳夫

塩谷郡玉生村大字上寺島、農喜一氏の三男、幼より不幸にして三才にして父と死別れ、母に育てられしが、これ又二十才の時母にも死別れ、二人の兄も早く病死し己れ孤獨の身となつた、長兄の子二人あるのを養育せねばならぬ責任がある、玉生小學校卒業後鑛山夫として働き、後足尾銅山にて勞役に従事せしが應召されたものである、アツツ島に於て戦死 歳二十七才

### 曹 長 件 内 誠

塩谷郡泉村大字立足二十一番地伴内岸松の長男、大正五年五月十日生、母はキノ何れも兩親は出征中死亡した、姉二人、弟二人、妻との間に一男一女ある、泉尋常高等小學校を卒業して後、農事に従事し父母の手傳をした、身体強健 温厚篤實にして模範青年であつた、昭和〇〇年〇〇月〇日朝鮮〇〇〇〇

一六  
〇〇某聯隊第〇中隊に入營〇〇〇〇〇〇〇〇某戦闘に参加一旦除隊となつたが再三召集せられたものである

上等兵 山本 順一

塩谷郡北高根澤村大字寺渡戸の人、山本留吉氏の長男、母はハルと云ふ、幼にして友人の交誼厚く人に敬慕された、北高根澤尋常高等小學校を卒業せし後、農業に従事し父の手助をなし家の繁昌を計つてゐたが昭和〇〇年〇〇〇〇〇〇隊に召集令に接し、任務終つて歸郷せしが昭和〇〇年〇〇月再び召集に應じたものである、兄弟十人内男六人、女四人、昭和〇〇年〇〇月〇〇〇〇日アツツ島に在りしが、其夜兩親は順一氏の夢を見て何泣いてゐるのと聞いて、夢醒め翌二十九日には兩親は順一氏の身の上を話し、話しては思ひ出して涙ながらに田植をしたといふことである、昭和十七年に自宅を新築したが、出征以前既に自ら木取をしたのであつたが、其新築を見ずして戦死せられた。戒名は「淨嚴院玉碎忠順居士」と

軍曹 石塚 重男

塩谷郡矢板町大字倉掛五百三十七番地農石塚壽氏の三男、大正七年七月三日生る、七年前に母に死に別れた不幸兒にあつた、縣立矢板農學校を優等の成績を以て卒業、卒業後は東京日本橋區馬喰町日本生花市場に雜役として勤勞せしが、昭和〇〇年〇〇月〇〇日現役兵として志願した、獨立歩兵第〇〇〇〇〇〇隊に

入營した、昭和〇〇年〇〇月〇〇日歩兵〇〇〇〇聯隊補充要員として〇〇を出發、〇月〇〇日除隊、昭和〇〇年〇〇月〇〇日應召されてアツツ島に上陸したものであつた、兄弟九人ある、男五人、女四人

上等兵 滑川 寅雄

那須郡大内村大字谷川小字池端の人、父は滑川正壽氏、母はミヨシ氏の長男にして、大正三年十一月二十五日生る、性温厚にして青年の範たるものであつた、大内村尋常高等小學校卒業、農家に生れ兩親の指導により農事に従事せしが、昭和〇〇年〇〇月〇〇日臨時召集にて補充兵として〇〇〇〇第〇〇〇〇聯隊に入隊第〇〇隊に編入された、昭和十五年除隊となる、昭和〇〇年〇〇月〇〇日應召により〇〇〇〇部隊に編入其〇月陸軍要員となり〇部〇〇部隊に編入さる、子供二人あり弟の正雄氏もニュギニアウエツク港にて戦死した月々に二子を戦死せしめた兩親の心情察するに餘あり。

上等兵 永山 高一

那須郡狩野村東關根の人なりしが、昭和八年頃南郷屋に分家し松本家の相續人となる、父は己之吉その四男、母はトヨ氏と云ふ、三歳の時父に死別れ母の手にて養育せられた、槻澤小學校尋常科を卒業後、西那須尋常高等小學校高等科を卒業其後東京の某鐵工所の職工となりしが適齡に當り体格優良なるも近

眼のため補充兵となる、昭和〇年〇月〇〇日工兵隊に召集せられ入隊したるものである、アツツ島に戦死す、年二十三歳

上等兵 大窪庄治

那須郡境村大字下境二千四百三十番地大正三年七月十六日に生る、父は大窪金作氏の長男にして、十一歳の時母に死別る、境尋常高等小學校卒業後、烏山中學校に在學せしが家事上の都合退學し専ら農業に従事せしが、昭和九年十二月一日補充兵として某部隊に入隊昭和〇年〇月〇日除隊となるや直に再び召集された、アツツ島北海に上陸、子供一人あり。

陸軍曹長 松本茂

那須郡金田村大字富池字寺方の人、松本留吉氏の四男にして明治四十二年十月十日生る、市野澤の金田小學校を卒業後現役として昭和〇〇年〇月〇日野砲某隊に入營せしも除隊、昭和〇〇年〇月〇日高射砲〇〇〇隊に入隊、それより野戦に出動北支に中支に於て奮闘し戦功あり、北海アツツ島守備に向ふ、アツツ島東岸上陸守備の任にあつて奮闘を續けたものであるが、五月二十九日玉碎した。年三十五歳

上等兵 小堀満

那須郡荒川村大字大里四百九十四番地大正二年十二月二十五日生る、父は東一氏、母はサワジ氏、長男であつた、昭和〇〇年〇〇月〇日補充兵となる、昭和〇〇年〇〇月〇〇日教育召集として第〇〇〇〇部隊に入隊、全〇月〇〇日教育終る、同日引續き召集、昭和〇〇年〇〇月〇〇日より昭和〇〇年〇〇月〇〇日まで待機、荒川小學校卒業後農事に従事してゐた、妻子あり。

陸軍曹長 白石廣志

那須郡高林村大字百村千五番地に生る、小字穴澤と稱する部落にして父は白石辨治郎氏の三男にして性温厚、友人の親しみよく惜まれた人物であつた、高林尋常高等小學校卒業後以來、家業の菓子製造業の手傳をなし、両親に事へて孝養を盡した、別に特別の技術に長したることなきもすべて副業に巧みして自ら風を造りてはあげ、下駄緒、草履なども自製のものを使用した、昭和〇〇年〇月〇日入營したるのである。

陸軍歩兵中尉 森山茂

上都賀郡落合村大字岩崎三十八番地森山源六氏の長男にして母はナル氏、明治三十九年五月二十三日生る、父は昭和十六年七月死亡し、母親に仕へて孝養を盡した、縣立宇都宮農學校を卒業し、氏家の穀物検査員となる、適齡に當り現役兵を志願し大正三〇年〇月〇日〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇聯隊に入隊した、昭和〇〇年〇月除隊となる、同〇月陸軍歩兵少尉に任せらる、青年學校指導員となりしも昭和〇〇年〇月より昭和〇〇年〇月また縣立今市中學校教官となる、昭和十六年父死亡するや退官専ら家業に従事せしが昭和〇〇年〇月〇日東部〇〇〇部隊に召集入隊したる儘アツツ島に出發したものである、妻子あり子供三人第二人とも滿洲に警官と教員となりて活躍してゐる。

## 上等兵 翠田榮三

上都賀郡北犬飼村上野原茂呂の人、父は菊次郎氏、母はイク氏にして其次男である、大正十年三月二十四日生る、鹿沼尋常高等小學校卒業、父は十三歳の時死亡し母の手にて養育せられた、小學校卒業の後、は東京に出でて鐵工場の一員となり日夜勤勉日頃増産に貢献してゐた、昭和〇〇年〇月〇〇〇〇〇〇隊に入營し其〇月〇〇〇日北門に向つて出發したるものである。

## 上等兵 金子義一

上都賀郡加蘇村大字加圖の出身で、父は茂吉氏、母はケイ氏の長男として大正十年十月十二日生る、加圖小學校を卒業せし後は鹿沼農商學校農科を卒業した、修學中と雖もよく家業を手傳へ親によく事へ孝行の譽あつた、昭和〇〇年補充となる、昭和〇〇年教育召集として東部〇〇〇部隊に入隊、アツツ島にて玉碎、第二人妹一人ある、村内にても模範青年として要望された人物であつた、其の母ケイ子は昭和十九年一月五日死亡、祖母のサク子元氣よく働いてゐる、弟の由次君目下鹿沼農商學校に通學、戒名は「玉碎院義貫道順居士」

## 上等兵 小田垣友四郎

下都賀郡家中村大字家中小字上新田五千百五十三番地の人、父は大作氏母はサツ氏にして其四男に生る母は六年前に死亡、大正三年八月一日生る、家中小學北校を卒業してより栃木市萬町荒物商佐藤平吉氏宅にて商業の見習をした、常に誠意を以て主人に事へ商業の大秘訣である信用を得るに眞似面にして、且つ客に懇切、誠實であつたので主人よりも惜まれた人であつた、後東京に出て江戸川に自立して營業を開店した、常に信用ある身なれば衆望を得て妻を迎へ營業増々發展したので父親も非常に喜び、杖と頼み、柱と力にしてゐた、妻のチヨ氏との間に一男を生む、補充兵なり、戒名「恒久院玉碎清範居士」

## 上等兵 五月女信一

下都賀郡豊田村大字小宅に生る、母はサムといふ、本籍は小山町稻葉郷にあるが、國分寺村大字小金井四五高田己之助氏に養はる、早く父母に別れ叔母モヨ氏幼少の時より引取り養育した、モヨ氏は高田己之助氏の妻にして親切なる叔母夫婦に育てられ、豊田南小學校にて學ぶ、箱森に瓦製造に従事しよく勤勉の評ありて主人これを惜みしが十八歳の時家庭の事情ありて止むなく川崎鐵工場に入り勤勞をことごとくもせず國のためなりとて能く働いてゐたが、補充兵として三ヶ月教育に召集し、除隊となるも再び召集第〇〇〇部隊に入營したものである、年二十四歳、本籍は小山にあるも養育せし高田己之助氏遺族として後を弔ふ村葬も國分寺村にて執行した。

## 上等兵 鈴木蜜雄

下都賀郡桑村三拜河岸の人、間々田町乙女河岸曾篠寅吉氏の三男にして昭和九年十月三拜河岸鈴木善太郎氏の養子となつた、性温良にして孝心厚く養家の両親も喜び良き聲迎へたりと安堵し一家和樂模範的家庭であつたが不幸にして翌昭和十年三月養父は病死した、爾來家業を繼ぎ農業に精を出し隣近所の者にも褒められた程であつた、補充兵として〇〇〇某隊に入隊した、妻キンの間に一男三女がある。

## 砲兵兵長 若林秀次

下都賀郡國分寺村大字箕輪七百壹番地に生る、現在は大字小金井三千九番地に住す、父親とは早く別れ母親に養はる、明治四十五年三月十五日生る、國分寺小學校尋常科を卒業の後専ら家業を手傳へしが後東京に出て荷馬車業の助手となる、徴兵検査の結果補充兵となる、昭和〇〇年〇月〇〇〇日東部〇〇〇部隊に應召昭和十八年五月アツツ島に於て戦死したものである。

## 上等兵 田名綱卯八

足利郡富田村大字駒場の人、父は豊次郎氏、母はハマ子と稱し其次男である、大小山の麓、常盤木茂き駒場の里に大正四年三月四日生る、悲しいことには七歳の十一年に母に死別れ父の手に育てられた親孝行の卯八はよく親に事へ、母亡き後も父の手助けとなりて幼少にも拘はらず、家事の手傳をなし自ら人手を煩はさず自分のことは自分で始末した、兄と姉とあつたが何れも天死し淋しい生活をした、父と二人の暮にて父も卯八を後嗣者として愛育した、富田小學校をば優良な成績で卒業し、其後富田郵便局の集配となり人の模範であつて、能く其職務に忠實で親切に其職を全うした、父親は常にロウマチスにて身体自由ならず家業も思ふに任せず、親思への卯八は常にこれを氣にしてゐた、適齡に達するや補充

兵となる昭和〇〇年補充兵にて教育召集を受け第〇〇〇部隊に入隊した、昭和〇〇年〇月〇〇〇日北邊に向つた。

上等兵 近藤元八

足利郡三和村大字板倉の人、父は利八、母はチャウ氏其長男にして大正六年三月十七日松田川畔の實家に生る、三和尋常高等小學校高等科を卒業したる後専ら父の家業を助け機業に従事し、特に引ッ込ミ業に妙手を得、年若けれと獨特の技に長して好評を得た、昭和〇〇年〇月〇〇日〇〇〇〇〇〇〇部隊に召集に應し入隊した全年〇月除隊するや直に再應召せられた、〇〇〇〇日北海に赴きたるものである兄弟五人二十四才の時父を失ふ、其後母を助け努力したるものであつた。

上等兵 青木章男

足利郡三重村大字今福四百三十四番地の人にして、父は博一氏、母はヒサ子の長男にして大正七年一月一日生る、昭和十五年母に死別れしを助けて孝行を盡し家業の手傳に勞力を惜まず近隣の衰め者であつた、三重尋常高等小學校高等科卒業の後は年若きにも似ず家業に従事し燃糸業の道に達した。戒名 功宗院玉碎章董居士

軍曹 藤田武

芳賀郡茂木町宇栲梗町の人、父は正助氏、母はキヨ氏の長男、大正九年三月十六日生る、兄弟六人、内男三人、女三人にて八人の家族にて至極圓滿な家庭であつた、茂木小學校を卒業して後、縣立茂木農學校を卒業、性温良にして正直、學術又優良の秀才であつたので、煙草專賣所にては其人物なるを見込んで之れを採用見習として始め雇員とせしが將來有望な官吏たるの風あつた、現役兵として昭和〇〇年〇月〇日〇〇第〇〇〇部隊に入營せしも病氣の爲め宇都宮病院に入院治療せしも間もなく全快となり、昭和〇〇〇〇月拔擢せられて地方に出動したものである、御兩親を訪問するに湯呑と煙草とを慰問品として送れとの書狀あるも、郵便局にて受附けざるため發送しなかつたのが残念でしたが弟二人あるから力強し、兄の仇を討つてやると元氣のよいことを言ふて呉れるので頼母しく居りますと、戒名 北海院武烈忠實居士

上等兵 阿部千岡

芳賀郡久下田町谷田貝八百〇六番地阿部啓三郎氏の二男、母はソヅ子氏大正七年生る、性快活にして明朗の人、衆人に好まる、怒ることなく常に笑顔を以て人に接し好感を與へた、久下田小學校高等科三學

年を修業、其後下館町の吉崎嘉助（吉宮呉服店）に入りて商業に従事し主人の信用高く友人間にも又人望を得た、昭和〇年〇月〇日補充兵として召集せられて〇〇部隊に入隊〇〇翌〇月〇〇日歸郷、昭和〇〇年〇月〇日再び應召〇〇に入隊、それより〇〇〇に轉住、八月中は日光御警衛の任に當つたこともあつた九月には〇〇にも轉じた、呉服店を出てより陸軍工廠に約八ヶ月位勤め又川島の精工會社に或は中島飛行場の見習となりしことありしが、何れも信用厚く應召の際は衆人に惜まれ盛大に送られた。  
戒名 忠誠院芳譽天千岡清居士位

軍曹 田上丈男

芳賀郡中村大字長田五百八十七番の人、父は良太郎氏、母はヌイ氏の三男にして性温厚にて學術を好む中村尋常高等小學校を卒業し直に縣立眞岡農學校に入り優等を以て修業、十八歳にして朝鮮平壤師範學校に入學し、六ヶ月にし業を卒へ雲山公立普通國民學校教員を拜命、十八歳にして教員職に就きたるの天才兒であつた、昭和〇年〇月〇日現役兵として〇〇部隊に入隊、昭和〇年〇月〇日〇〇に編入せられアツツ島に出征玉碎されたものである。年二十四歳

上等兵 水沼 二二三

芳賀郡水橋村大字東水沼梨木ノ原七十番地の人、水沼ミト氏の長男、茂榮坂にある東水沼分教場にて學び尋常小學校を卒業をした、卒業後は専ら實業に従事し足尾銅山に或は日立鑛山に工員として従事し、其職責を全うしつゝありしが昭和〇年〇月補充兵として〇〇部隊に召集せられ引續き各部隊に編せられ昭和〇年〇月〇日アツツ島にて玉碎せられ者である。年二十九歳

上等兵 福田 誠

芳賀郡祖母井町祖母井の人、父は甚平といふ、母はフデ氏其次男にして大正十年九月三十日を以て優健全兒として誕生、祖母井尋常高等小學校卒業後、東京に出でて實業家たると志し明電會社にて業務に従事した、補充兵として昭和〇年〇月〇日〇〇部隊に召集せられ、〇〇隊に〇營した、其後各隊に編入せられ、北海に赴きアツツ島に上陸したものである。

戒名 照光院北溟忠誠居士

玉碎の御魂に月を照り渡る 季山

兵 長 高祥 允 壽

芳賀郡逆川村大字小貫の人、父は高祥勝太郎氏にして母はうめ氏、其四男にして兄三人とも國の爲めに

奉公の身となる、姉一人あり大正七年七月四日生る、性温厚にして家業に従事せし時は両親に信用さる逆川の小学校修業せし後は洋服仕立業に従事し、技術又巧みにして先輩をしのぐ技能を有した、補充兵として昭和〇〇年〇月〇日〇〇部に召集し三ヶ月を以て解除となるも全〇年〇月〇日再び召集  
戒名 北海院王碎盡忠居士

## 清 宮 義 一

芳賀郡逆川村大字深澤の人、清宮與四郎氏の長男である、本籍は深澤なるも住所は茨城縣小川町にあるので遺骸は深澤に埋葬せず、小川町にある。

## 上 等 兵 藤 田 三 吉

芳賀郡山前村大字小林の人、藤田艶吉氏の四男、母はタツ氏、大正八年生る、性温厚の人にして人望あつた、山前小学校を卒業してより農事に従事し親の手助けをしてゐた、良縁あつた字内の藤田カク子と結婚したのは昭和十七年四月一日であつた、其四月十日僅か九日ばかり同棲し補充召集令を受けて〇〇部隊に入隊せしが其儘々應召となつた。

## 軍 曹 古 谷 野 金 平

芳賀郡物部村大字物井農、古谷野安平氏の長男にして母はヒデ氏と云ふ、大正四年九月二十九日生る、真岡農學校を卒業し、父の後を受けて農業に従事せしが現役兵を志願し昭和〇年〇月〇日〇〇部隊に入營、十二月上等兵に進級滿洲の派遣軍となり滿一ヶ年二ヶ月にして伍長になりて除隊となる、昭和十三年四月物部村青年學校指導員となる、其勤務中昭和〇〇年〇月〇日應召教育係として勤務した、昭和〇〇年〇月〇日〇〇を出發して〇方面に向つたものである、家庭には両親の外に妻子もある。

## 上 等 兵 小 林 源 一 郎

芳賀郡物部村大字下物井下原小林朝次氏の長男、母はヨシ氏、大正四年九月一日生れ、物部小学校卒業後は東京に在りてコックを勤めしが後川口市の池貝軍時鐵工所に勤務中補充教育として昭和〇年〇月〇日〇〇部隊へ入隊したまゝ應召となつたものである、兄弟八人、子供三人あつた、父朝次氏言ふ昭和十七年十月二十四日が面會日であつたのに種々の都合で〇〇日に宇都宮の隊へ面會に行つた、すると昨夜出立したと聞いて面會しなかつたことが残念であつたと、御國の爲めに戦死したのだ名譽である、弟が幾人もあるから兄の仇は打てるよと元氣で語られた、自分も此話を聞いて力強く思つた、感激した。  
戒名は北淨院忠烈源心居士



### 會員 竹石半平氏奇特

本會員竹石半平氏は、アツツ島玉碎勇士の新聞紙上に發表せらるるや非常に感激し、其功績を賞揚せられ直に四百五十圓を投げ出し、各其遺族に對し弔慰金として拾圓つゝ靈前に供へ英靈を慰めたことは奇特と言ふべし、金あるも、暇あるも實行することの尊き其人格を表現したものである、竹石氏より弔慰金を受取感謝狀を寄せられたる者は左の如し。

- |         |       |         |       |        |       |
|---------|-------|---------|-------|--------|-------|
| 那須郡大内村  | 滑川 正壽 | 佐野市     | 茅原 トメ | 栃本市本町  | 戸澤 繁一 |
| 東那須野村富池 | 松本 等  | 小金井     | 若林 カネ | 足利郡三和村 | 近藤シミウ |
| 大澤村上猪倉  | 福田福一郎 | 宇都宮市西原  | 山田 君子 | 桑村     | 鈴木 きん |
| 北高根澤村   | 山本 留吉 | 大澤村木和田島 | 福田 徳平 | 足利郡三重村 | 青木キイ子 |
| 物部村     | 小林 鯉次 | 泉村      | 伊内 ミヨ | 矢板町倉掛  | 石塚 等  |
| 芳賀郡中村   | 田上良太郎 | 水橋村梨大原  | 水沼 ミト | 茨城縣小川町 | 清宮興四郎 |
| 宇都宮市旭町  | 渡邊 サト | 宇都宮市花房町 | 早瀬 文藏 | 狩野村    | 永山 作  |
| 那須郡境村   | 大窪 金作 | 河内郡雀宮村  | 小林才一郎 | 家中村    | 小田垣代作 |
| 上三川町井戸川 | 星野金三郎 | 明治村大山   | 清水清一郎 | 祖母井町   | 福田 隆  |

- |     |       |         |       |     |       |
|-----|-------|---------|-------|-----|-------|
| 東京都 | 五月女達三 | 宇都宮市江野町 | 土屋 ミツ | 佐野市 | 栖原 ツネ |
|-----|-------|---------|-------|-----|-------|

### 遺族訪問焼香

昭和十八年十月三十一日宇都宮市西原町山田元雄君遺族訪問弔辭を述べ、御家族元氣にて銃後の守りに力強きことを申された、江野町土屋二雄君宅訪問、土屋君は快活の人、一日も早く出征いたしたいと日々念してゐた、戦死した後は獨身を守つて家業に精出し軍人の妻としての本務を盡されたいと遺言して勇んで出征したと、渡邊春雄君をは午后二時訪問焼香、母親げなげにも出征すれば戦死は覺悟ですと申されたが心を慰めて歸つた、花房町の早瀬万吉君を訪問、兄君の妻君に面會焼香十一月一日河内郡上三川町江戸川星野義雄君遺族慰問す、父の金三郎氏は畑仕事せるが宅に歸へりて訪問を謝す、焼香せし後其來歴を問ふた、孫を遺して戦死されたのは残念であるが、御國の御奉公止むを得ない、私共は七十才以上の老人ではあるが嫁や孫を相手に忤に代つて増産に精を出して前線の兵士に仇をとつて貰へますと申された、其家を後にして足を走らせて明治村大山清水清八君の遺族を訪問焼香す、英靈を安置する座敷の疊換へをすると職人が仕事するので位牌を他室に移すといふ多忙な時であつた、更に足を早めて雀宮村に來り小川治平君遺族を訪問、家族不在なれど弟と妹だけ在宅なれば座敷に上り英靈安置する間にて焼香した。

十一月七日河内郡大澤村上猪倉福田勝一君遺族訪問焼香した、君は妹思やりの方で折々手紙をよこせど妹の將來のことばかり、やさしい人であつたと母は涙ながら話された、妹の某は兄の遺志をつぎ増産に勤め家業の手傳やら勤勞奉仕に骨身を惜まず働く積りだと元氣に語らる、木和田島福田太郎君の遺族訪問せんとせしも尋ね當らず、路傍にて其家を尋ねるに折よくも太郎君の母君來る幸にして案内され焼香した、舊曆十月十日餅を中食に御馳走になつた。

十月十四日塩谷郡矢板町會掛石塚重雄君遺族訪問、山坂を登り又下つてやうやくにして其家を尋ね當てた、焼香をすまして又山坂を越え、大宮村田所地内を通過して玉生村に出て、上寺島大關徳夫君遺族を訪問、徳夫君の兄は既に死亡し、其遺子二人ありしを自分養育する任務であつたのを今戦死しては其遺子を養育する者なしと聞くも憐れに思ふた。

十一月二十三日鹽谷郡北高根澤村寺渡戸山本順一君宅訪問焼香、其日は父君組の内に戦死者の家に悔み行き、母は畑仕事に出て留守であつたが妹君が迎ひに行く、其内に父も母も歸へらる慰藉した。

十一月二十九日芳賀郡物部村物井古谷野金平君、物井下原小林源一郎宅訪問焼香、何れも今日の場合戦死むを得ない、又々後に弟何人もあるから兄の仇は打てますと元氣であつた、山前村に向ふ途中の山林中にて握飯を喰ふ、山前村小林藤田吉三君宅訪問せしに全戸不在残念ながら焼香せず真岡まで歩つて歸へる。

十二月五日那須郡大内村谷川滑川寅雄君訪問焼香、馬頭町より徒歩二里往復四里

十二月十二日那須郡金田村大字富池宇寺方松本茂君遺族訪問焼香、妻子は小淵に居らるる、由それより急ぎ西那須野に來り狩野村南郷屋の永山高一君遺族訪問焼香、家族は煙草のしにて多忙に見受けた。

十二月十四日那須郡境村大字下境大窪庄治君宅訪問焼香、下境より烏山仲岡村實君遺族訪問せしに家族は東京都瀧野川に移轉し遺骨も位牌もなければ焼香をせず直に向田村瀧を経て荒川村に向ふ、山を越え坂を登り、谷を下り森田に出て更に大里にて小堀満君の遺族を訪問焼香

十二月二十一日上都賀郡落合村岩崎にて森山茂君を遺族訪問焼香、それより鹿沼町に來り翠田榮三君宅の所在を尋ねた、北犬飼村上野原茂呂にて翠田榮三君宅に焼香

昭和十九年一月十七日芳賀郡水橋村東水沼水沼二三君の遺族訪問焼香、西水沼と發表されたので、西水沼にて自動車より下車した、西水沼にはなさと聞き村役場に行き尋ねしに東水沼梨木原を教へられ其處を尋ね焼香、直に祖母井に行き福田誠君遺族を訪問焼香

二月二十日芳賀郡中村長田田上丈男君遺族を訪問、上三川町を通り鬼怒川を渡つて長田に行き、田上家にて焼香の後歩つて真岡に行き更に久下田町阿部品の阿部千岡君宅を尋ねた、然るに阿部氏は阿部品より分家して目下久下田町谷田具に住居し、遺骨も兩親も其處に居らると聞き、更に谷田具に戻つた、遺族訪問焼香した。

二月二十二日小金井若林秀次君桑村三拜河岸鈴木蜜雄君宅訪問焼香、遺子何れも元氣であつた。  
 二月二十七日 足利郡三和村板倉近藤元八君遺族を訪問三重村今福青木草男君遺族をも訪問何れも焼香した、歸路につき足利驛に着けば停車場にて切符賣切れとある、佐野行バスに佐野へ、それより静和に出てやつと歸宅し得たのである。

三月二十日足利市本城二丁目丸山新次君、本城三丁目横山兵四郎君、旭町須永元次君の遺族訪問焼香  
 三月三十日足利郡富田村駒場田名綱卯八君遺族訪問焼香、母に別れ父親のみ、身体不自由と見受けた佐野市に來り植野町にて茅原清君金屋下町栖原治平君遺族訪問焼香、往復とも汽車電車満員窓より飛び降した。

四月六日栃木市本町戸澤吉之助君遺族訪問焼香、電車三時間も遅延

四月十一日下都賀郡家中村上新田小田垣友四郎君遺族訪問焼香

四月十七日茂木町結梗町藤田武君に焼香した

四月二十四日小金井にて高田己之助氏宅訪問す、五月女信一君の靈に焼香、五月君は幼より高田氏に養育されたので親に代つて世話された者である。

五月二日芳賀郡逆川村深澤清宮義一君宅にて焼香したが、英靈は茨城縣小川町清宮與四郎氏宅にある、深澤より分家したと、小貫高祥允壽君遺族訪問焼香、當日は七井より通勤する小貫國民學校長若林喜久

治氏の案内を受けたこと、途中友人平島五一氏宅に馳走になつたことを多謝す。

五月二十三日上都賀郡加蘇村加園金子義一宅訪問、鹿沼より徒歩焼香、昨年十月より五月に亘つてアツツ島玉碎勇士の家庭を一々訪問焼香したが、泉村長井の伊内君の靈には親戚の伊内万壽氏を代理として焼香高林村白石廣志君は兄田代音吉氏を以て代理として焼香した、これにて滞りなく全部焼香が終つたのである。

### 追善供養施行

昭和十九年五月二十九日は恰度一年忌に當るので、本會にては宇都宮市寺町生福寺にて追善供養を行ふた、此日午後一時遺族一同着席次に會員に次で導師僧侶着席するや、田代會長は供養施行の挨拶、國民儀禮、祭文讀經などあつて閉會、遺族には僅少ながら御供の赤飯と御茶と塔婆を頒布し懇に供養を了した、出席した遺族は、福田徳平 阿部啓三郎 福田勝一 小林鯉次 山本留吉 大窪金作 小堀東一 星野金三郎 翠田イタ 伊内誠遺族 茅原トシ 森山遺族 滑川遺族 藤田三吉遺族 永山フヨ 福田誠遺族 早瀬文藏 清水清一郎 若林秀次遺族 土屋二雄遺族 渡邊遺族の諸氏  
 會員としては菊池次郎 菅又薫の兩賛助員の外長嶋長參 富田庄作 淺野松藏 瀧澤佐市 田中徳三郎 布施貞一 廣瀬嘉吉 高松勸農雄 松井恒太郎 田代黒瀧の諸氏  
 本供養を行ふに當つて阿久津村土屋喜四郎氏、幹事松村貫一氏の物資供給係として盡力せしが、松村氏

は二十一日急病に冒され立つことの出来なくなつたため萬事不行届きとなり、參列遺族諸氏に對し御粗末になつたことは慙愧に堪えなかつた、但し御多忙中にも拘はらず多くの御遺族の御參列と導師塚田大賢師外各僧侶の御奉仕會員諸氏の御參列によつて盛大に營むことの出来たことは満足する所である、又阿久津村土屋喜四郎氏の御厚意など深く感謝に堪えない。

結 び

アツツ島にて皇國將兵が玉碎になつたといふことが新聞に發表された、其時余の胸に打たれた感激は生涯忘れられない程である、勇壯義烈なる山崎部隊長以下の將兵のことを思へば一時もじつとしては居れなかつた、されど徐に自己の立場を考へる時、郷土研究の責任がある、又教育者の身分である、これぞ郷土教育の好資料である、第二の國民の精神教養の好機であると深く感じたのである、せめては縣内の遺族でも訪問し、燒香をなし慰問と供養を兼ね行ふて英靈を慰めたいと考へたのである、各家庭を訪問燒香し、次いで五月二十九日の命日に宇都宮市生福寺にて追善供養を行ひ、更に勇士の略傳を刊行し佛前に供へ永へに其芳勳を傳へたならばこれ終始一貫した自分の意志が遂行されることになる、英靈も地下にてさぞ御喜びのことと思へ本誌を刊行した所以である、此勇士を範とし盡忠報國、滅私奉公の精神を喚起せしむるの好機である、教育者たる者逸すべからざるの時である、是等勇士を中心に青壯年の皇國精神を強調すべく參考にしたいと思ふので本書を著したのである。

健康な体で充分銃後を守つて下さい、健民は力強い國家の礎です  
信用ある病醫院を紹介致します

(順序不同)

耳鼻咽喉科		婦人科 新部醫院	
院長 醫學博士 渡部 齋	宇都宮市一條町	院長 新部 岩 吉	宇都宮市旭町
菅又醫院 内外一般		小兒科 荒井病院	
院長 菅又 薫	塩谷郡北高根澤村	院長 荒井 清 一 郎	宇都宮市杉原町
一般科 小澤病院		枝 病 院	
院長 小澤 鉄 五 郎	那須郡烏山町	院長 枝 廣	宇都宮市旭町
耳鼻咽喉科		秋 葉 醫 院	
院長 長野耳鼻療院	宇都宮市旭町	院長 秋葉 豊 吉	下都賀郡生井村
院長 野 祐	宇都宮市旭町		

501  
85

眼科 稻葉病院 院長 稻葉 治三郎 宇都宮市旭町	齒科 小野醫院 院長 小野 春吉 宇都宮市池上町	間中病院 院長 醫學博士 間中長一郎 宇都宮市上河原町	科外 佐藤醫院 院長 佐藤 幹次 宇都宮市一條町	科外 双葉病院 院長 後藤 健介 宇都宮市江野町
齒科 三宅醫院 院長 三宅 映孝 宇都宮市上河原町	鮎田醫院 院長 鮎田 壽郎 上都賀郡西方村	耳鼻喉科 糸川醫院 院長 糸川 平作 宇都宮市尾上町	國府醫院醫療一般 院長 國府 虎胤 下都賀郡瑞穗村	眼科 原病院 院長 原 圭三 宇都宮市一條町

昭和十九年十二月二十八日印刷  
昭和二十年一月二日發行

宇都宮市西原町二五二一  
著者 田代 黑瀧  
宇都宮市二條町四五  
印刷者 福田 庄太郎  
宇都宮市二條町四五  
印刷所 栃木縣重要印刷株式會社  
宇都宮市西原町二五二一  
發行所 下野史談會

終

